

完全否定を表す副詞に関する特徴分析

—量・程度の観点からのアプローチ—

陳 澤佳

Feature-Analysis of the Adverbs that Express Complete Denial: An Approach From Quantity and Extent

CHEN Zejia

概 要

表达量和程度的完全否定的副詞，在以往的研究中常被看作“语气副詞（「陳述副詞」）”，其与否定同现时的特征是讨论的焦点。本文认为这类副詞同时也表达量和程度的强调，一部分也可以与肯定同现，它们兼具“评价性”和“程度性”，跨“语气副詞”和“程度副詞”，因此，以往的研究缺乏对其性质的全面认识和对其语义、句法方面的综合的体系性考察。本文力图通过量、程度的语义侧面对其做出分类和全面的特征探讨，期待本研究结果能够有助于日语教学和语言类型学研究。

本文将完全否定副詞按否定实现的方式分为“少量完全否定副詞”和“全量完全否定副詞”，并揭示出它们在语义和句法上呈现共性和特性。在语义上，两者虽然同样表达对被修饰语的属性、状态的程度、量的完全否定，句法上也同样主要修饰特定类型的动词，但是“少量完全否定副詞”因为否定最小极限量（程度），与否定的联系更紧密，句法上更受限，常常用于表达发话者的相对主观的内在的心情。与之相对，“全量完全否定副詞”因为否定最大极限量（程度），肯否句中都能使用，句法上更自由，常常表达发话者的相对客观的外在的心情。

キーワード：完全否定 副詞 少量／全量 肯定・否定 程度・陳述

1. はじめに

常に否定文脈で現れる副詞は、一般的に「陳述副詞」とされ、モダリティ的な側面をめぐり、否定と共起する場合の特徴検討が前面に出されている。そこに二つの問題点が出てくる。一つ目は、「陳述副詞」とされるのは相応しいかということである。否定と呼応する副詞に、「決して」といった陳述的な「評価性」の色濃いものばかりではなく、ことからの程度性の色濃いものも含めている¹。例えば、程度を強調する「ちっとも、少しも、全然、全く」などである。それらを「陳述副詞」と「程度副詞」のどちらに位置づけるかが問題になる。二つ目は、このような語群には否定のみと共起するものもあれば、肯定とも共起するものもあるので、一方的に否定との共起を重視しては全面的な検討とはいえないということである。

以上の問題点をきっかけとして、そして、考察の前提として、本稿は、量・程度の面で、否定を強める完全否定を表す副詞を研究対象とし、それらに程度性と評価性の二面性があると主張する。以下の例文に使われる副詞がそれにあたる。

- 1) ジェイ君がどう思ってるかはちっともわからなかった。(『パメラ パムラの不思議な一座』)
- 2) みんな平均的な人間になっちゃって、少しも面白くないんです。(『“超自然人” サンコンの「視力6.0」が見たニッポン』)
- 3) 横尾さんの絵がどういうものか、私、それまで全然知らなかったんです。(『横尾忠則365日の伝説』)
- 4) まるで、世界はさもしく恐ろしいがゆえに自分たちにはまったく

¹ 工藤 (1983) は、程度副詞に評価性と程度性の二面性があると指摘し、それを他の二種の副詞 (状態副詞と陳述副詞) と連続的に捉えている。筆者は、ここで、この二面性を援用する。

関係がないと言わんばかりだ。(『切り刻まれた少女』)

これらの副詞はいずれも完全否定を表すが、実現する角度によって、少量・低程度が否定され、完全否定になるものと、全量・高程度が否定され、完全否定になるものとに分けられる。本稿では、前者を「少量完全否定の副詞」、後者を「全量完全否定の副詞」と呼ぶことにする。

「少量完全否定の副詞」：ちっとも、少しも、いささかも、微塵もなど

「全量完全否定の副詞」：全然、まったく、まるで、さっぱり、まるっきりなど

この2類の副詞は、以下の否定文で、お互いに置き換えられる場合と置き換えられない場合がある。

5) ジェイ君がどう思ってるかはちっとも (少しも／全然／まったく) わからなかった。(例1)の再掲)

6) 東京へは、全然 (*²ちっとも／*少しも／まったく) 行ったことがない。

また、肯定文との容認度も違う。

7) 4月と今日では相手への脅威も全然 (まったく／*ちっとも／*少しも) 違う。(『京都新聞朝刊 2005/9/30』)

本稿は、このような点に注目し、2類の副詞が意味特徴、構文特徴(共起する否定述語のタイプ、肯定との共起状況)の面における共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。紙幅の関係で、副詞を網羅的に扱うことはできないが、使用頻度の高い順に、それぞれのグループに「少しも」「ちっとも」と「まったく」「全然」を抽出して、「現代書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を利用して検討する。また、個々の語は固有の意味領域や用法を持っているので、同じグループに属しても

² 記号の説明について：[*] は非文法的を示す。

まったく同様に機能しているわけではないため、代表例の考察結果で類別する副詞のすべてに全部当てはめることはできないかもしれないが、まずは似ている点から全体的に把握し、個々の位置付けを明瞭にした上で、今後の内部差異考察には非常に役立つと思われる。

2. 先行研究

完全否定を表す副詞についての研究は、多くあるものの、個別的な語の意味用法の研究及び二つの類義副詞の比較研究に止まっているものが多く（森田（1977）、有光（2002）、今西（2005）など）、少ない体系的な研究においても、「陳述副詞」か「程度副詞」かのどちらかの枠組みに置かれる概論的なものがほとんどである（工藤（2000）、仁田（2002）など）。筆者管見の限り、量・程度を突破口にし、「程度性」と「評価性」の二面を念頭に入れながら、完全否定を表す副詞を種類分けして全面的に考察するものはない。

ここで、代表的なものとして、工藤（2000）と仁田（2002）の研究を取り上げる。

工藤（2000）は常に否定と呼応する陳述副詞を三つのタイプに分けた。その中のBタイプは形容詞述語と動詞述語だけを修飾するもので、量・程度の面で完全否定か不完全否定かに分かれる。（表1）

表1 工藤（2000）が否定と呼応する副詞に対する三分類（部分）

述語のタイプ	否定のあり方		副詞
B 形容詞述語 動詞述語	量・程度	完全	ちっとも、すこしも、いささかも、みじんも、まるで、まるっきり、全然、さっぱり、一向に
		不完全	あまり、たいして、さして、さほど、それほど、そんなに、そう

工藤氏の分類に対して、さらに研究を深めて行きたい三点を補足したい。一つ目は、Bタイプに属する副詞はそれだけではない。「まったく」も量・程度の完全否定を表すことからBタイプに入るとされる。二つ目は、Bタイプの副詞が修飾する述語に一定の特徴が見えることは定かではあるが、どのような述語への傾きが多く見られるか、その述語の下位分類についての共起状況はどのようなものであるかについてはまだ解明されていない。また、完全否定を表す副詞の内部における差異については触れていない。

その他、工藤氏は、陳述副詞は語彙的否定形式との共起もあると指摘されるが、「いい」「普通」「ok」など否定的な意味が含まれない語との共起現象には触れなかった。

仁田（2002）は、研究対象を「命題の内部」における副詞的成分に限定し、「程度性中心」の観点に立つ。という点では工藤（2000）と出発点が異なる。仁田氏は副詞的成分を、大きく、結果の副詞・様態の副詞・程度量の副詞・時間関係の副詞・頻度の副詞に分けた。「程度量の副詞」の下位分類の「量程度の副詞」³に関しては、以下のような説明がなされている。

否定文脈で使われる程度に関わる副詞には「たいして、さほど、あまり、さして、そんなに、ちっとも、少しも、一向に、てんで、全然、まったく」などがある。この中で「ちっとも、少しも」や「一向に、てんで、全然、まったく」は全面否定を表している。特に後者は、属性・状態に対する程度限定としての用法を持つてはいるものの、中心的な用法は、事態の実現・成立の可能性という程度の全面否定を表す

3 程度や数量を共に限定できる副詞。

ことにある（中略）。これらは、形容詞の表す属性・状態の程度限定を行う構文にも、数量の限定を行う構文の中にも現れうる。

仁田氏はまず、完全否定を表す副詞を程度副詞に分類された。それから、完全否定には二つのタイプがあることを提示されたが、否定された量・程度の違いによるものだと指摘されなかった。また、両タイプの異同については、程度限定や数量限定という意味特徴の共通点に言及されたが、構文特徴などについては言及されていない。その他に、一部の副詞と肯定との共起現象に対しても言及されていない。

上記の先行研究が示された通り、それぞれの記述に注目される点もあれば、問題点や不十分な点もある。特に、体系的に、両タイプの完全否定を表す副詞を意味・構文特徴からさらに研究する必要があると考えられる。

3. 少量完全否定の副詞と全量完全否定の副詞の共通性

この節では、二つのグループに類別されている副詞の共通性について、意味特徴と構文特徴の二方面から考察を進める。

3.1 意味的特徴

完全否定を表す副詞は、述語の属性や状態を量の側面から、つまり程度か数量か頻度かなどを限定する。最も普遍的な意味特徴は程度の完全否定である。BCCWJを用い、四つの副詞をそれぞれ無作為に500例抽出して統計した結果、程度限定の例が占める割合は、「ちっとも」が93.8%で、「少しも」が95.4%であるのに対し、「全然」と「まったく」はそれぞれ94.8%と96.8%を占めている。

①程度限定

8) ちっとも 難しくない。(『倫理とは何か』)

- 9) 村はスハルト時代と少しも変わっていない。(『地球村の思想』)
- 10) そこのところの機微が今の人には全然わからない。(『表の論理・裏の論理』)
- 11) あのピアノにそんな思い出があるとは、まったく知りませんでした。(『先生のピアノが歌った』)

②数量限定

- 12) プーズは二冊の小説を書いていて、二作とも評判はよかったが、ちっとも売れなかった。(『マフィアの囁』)
- 13) 先ずその段階で少しも誤差がないことが望ましい。(『群像2001年10月号(第56巻第11号)』)
- 14) 本社側も乗気になって、さっそく各地でテスト販売した。しかし、ぜんぜん売れなかった。(『人・ひと・ヒット』)
- 15) つまり、PRは広告費がまったくかからない。(『宣伝費ゼロ時代の新しいPR術』)

③頻度限定

- 16) このごろ、ちっとも会ってくれないねえ。(『昔、火星のあった場所』)
- 17) おまえは、正教徒であるにもかかわらず、少しも弥撒に出ない。(『冬の旅人』)
- 18) 井深口にチャックしてね、奥さんのところに全然連絡せずね、晩まで遊びほうけて怒られたって、何遍も聞かされた。(『わが友本田宗一郎』)
- 19) 彼女は二十二歳で月に数回、母親と買い物に出かける以外はまったく外出していない。(『報恩感謝』)

工藤(1999)では本稿における少量完全否定の副詞について、「『少しも、ちっとも』などは、形容詞述語と共起して「程度」を完全否定する

場合（動詞述語であっても「似ていない、感動しない」のような状態性のものと共起する）と、動詞述語と共起して「量・程度」の側面を完全否定する場合がある。」と指摘した。このことに対して、統計結果から言うと、「少しも、ちっとも」は数量、頻度限定を行う例文では、確かに動詞述語としか共起しないが、程度限定を行う例文では、形容詞述語や状態性動詞述語の他に、「周囲の闇を少しも照らさない」のような運動動詞との共起や、「少しも民主じゃない」のような名詞述語との共起も多々あるので、一概にそうは言えないのではないだろうか。

上記の例文からも察するように、完全否定を表す副詞は否定文脈が表す客観的な意味に対する修飾はない。なぜかという、個々の否定文脈において、その副詞がなくても、文脈の客観的な意味は変わらないのである。つまり、事態・状態が成立しないことは変わらない。ところが、このことでこれらの副詞は量・程度との関わりを否認してはいけぬ。田中（1983）が指摘したように、「全然、さっぱり」などは「否定の対象面」で働き、量、程度、頻度といった叙述内容を修飾するものであるとされている。これらの副詞は少量あるいは全量まで否定されゼロの結果になるという過程を経て完全否定を実現するため、量・程度との関わりは無視できない。

3.2 構文的特徴

程度・量に関わる完全否定を表す副詞はスケール（目盛り）のない否定文脈では生起できない。詳しい構文的特徴は以下の3点にあると思われる。

3.2.1 特に認識活動を表す動詞述語と共起する

動詞述語との共起が基本的で、特に、認識活動を表す動詞⁴の否定形はどの完全否定のタイプにも現れる。用例を調査して、四つの副詞と共

に共起できるものは「わかる、知る、考える、感じる、思う、見る、覚える、聞く」の否定形である。

20) ジェイ君がどう思ってるかはちっともわからなかった。(例1)の再掲)

21) 現に母子はそのことに不自由を少しも感じないといっている。(『サンカの末裔を訪ねて』)

22) テレビを見ていてもぜんぜんわからない。(『安心報道』)

23) まったく思わない。(『たった一度のありがとう』)

3.2.2 静態動詞⁵や可能動詞との共起もできる

「似る、変わる」のような静態動詞や可能動詞（できる、もしくは動詞の可能形）の否定形式との共起がよく観察される。

24) 少しも似ていない私が、なぜかアルシニアになってしまった。(『ロマンスへの誘い』)

25) あの頃とちっとも変わらない。(『芸能界デビュー』)

26) 田舎の子だからそれができるかというと、全然できない。(『バカの壁』)

27) こうなると、イスラム教徒は、日本の通常の食肉店で売っている肉は、まったく食べられないことになる。(『古代史の結論』)

3.2.3 程度性のある名詞述語とは共起しうる

名詞述語とは基本的に共起し得ないが、程度性のある名詞述語とは共起しうる。

28) *ちっとも / *少しも / *全然 / *まったく 学生ではない。

29) ちっとも / 少しも / 全然 / まったく 美人ではない。

4 「認識活動を表す動詞」とは、感性的な経験を示す動詞、思考活動を示す動詞、発見を示す動詞を指す。(奥田靖雄1983:92-112を参照)

5 工藤真由美(1995)の動詞分類によるものである。

程度性のない名詞に助動詞「らしい」を付け加えるとスケールが生じ、完全否定副詞と共起できるのである。

30) ちっとも／少しも／全然／まったく学生らしくではない。

他に、規定語の付いている名詞述語とも共起しうる。

31) 男女生徒が仲よくするのは少しも悪いことではないが、クラス内に騒ぎが起きるのは困る。(『現代っ子相談室』)

32) ちっとも自由に考える雰囲気ではなかったですね。(『高校教師α』)

33) 全然恋愛対象じゃないし、会おうとか思ったこともないんですけど。(『Yahoo!知恵袋2005』)

3.3 まとめ

少量完全否定の副詞と全量完全否定の副詞の共通点について、二節をかけて、意味的と構文的の二方面から考察してきた。意味上、程度、量、頻度の面において述語が表す属性や状態を限定、強調し、特に程度の限定、強調は典型的な意味特徴である。構文上、いずれも、認識活動を表す動詞、静態動詞、可能動詞の否定形と共起するが、程度性のある名詞述語、また「らしい」を付け加えたり、規定語を入れたりしてスケール性を持たせば、程度性のない名詞述語とも共起しうる。

4. 少量完全否定副詞と全量完全否定副詞の相違点

この節でも前の分析と同じように、意味と構文の両方面から、相違点を検討していく。

4.1 意味的な相違点

4.1.1 置き換えられない場合

「ちっとも」と「全然」の意味的違いについて、グループ・ジャマシ

イ (1998) は、34) の例文をあげて、「ちっとも」は「回数を表す用法はない」と指摘した。

34) *ちっとも／全然行ったことがない。

「回数」は頻度が具体的に数値化したものである。3.1節で16) と17) の例で、「ちっとも」や「少し」には、「頻度限定」という意味特徴もあると示した。この場合では、「会う (出る)」頻度がゼロであることの強調で、「会ったこと (出たこと)」が「頻度」に抽象化されたから、共起できたのであると思う。それに比べて、述語の部分を「～たことがない」というようなはっきりと具体的な回数が想起される表現に置き換える場合は非文となる。

35) a. このごろ、ちっとも会ってくれないねえ。(例16) の再掲)

b. このごろ、*ちっとも／*少しも会ったことがない。

c. このごろ、全然／まったく会ったことがない。

36) a. おまえは、正教徒であるにもかかわらず、少しも弥撒に出ない。(例17) の再掲)

b. おまえは、正教徒であるにもかかわらず、*少しも／*ちっとも弥撒に出たことがない。

c. おまえは、正教徒であるにもかかわらず、全然／まったく弥撒に出たことがない。

「ちっとも」「少しも」はゼロに近い少量の否定によって完全否定を表すので、共起する述語はまず最小極限に否定できるものである。「出たこと／会ったこと」は最小限でも「一回」になるため、「一」にも達していない少量否定の「ちっとも／少しも」には修飾されないはずである。相対的に、「全然」「まったく」は全量を否定しているわけで、最大極限の否定によって完全否定になるので、「出たこと／会ったこと」を全般に否定できるのである。一様に、以下の文でも共起の違いが生じる。

- 37) a. 予算が全然足りなくて困ってます。(『Yahoo!知恵袋2005』)
b. 予算がまったく足りなくて困ってます。
c. 予算が*ちっとも / *少しも足りなくて困ってます。

「足りる」という動詞は状態上十分であることを意味するので、完全否定という強調を行う場合、「最大限の量・程度を足しても十分ではない」と解釈するのが適切であって、「全然、まったく」を用いる。それに対して、「ちっとも、少しも」を用いると、「最小限の量・程度を足しても十分ではない」という意味になってしまって、人間の一般的な認知に相応できない。程度の否定において、「全然、まったく」は「ちっとも、少しも」より生起環境の自由度が高いと言える。

4.1.2 置き換えられる場合

両タイプの副詞はお互いに置き換えられる例文においても、意味的に差が感じられる。

- 38) a. 全然／まったくわからなかった。(先生の教授法は下手)
b. ちっとも／少しもわからなかった。(自分の理解力は下手)

例38)のaとbは、ともに「わかること」を完全否定するものであるが、aはより客観的に「わからない」の程度を強調するのに対して、bは話し手の主観的な心情が帯びやすく、より負的なニュアンスが感じられる。括弧で括ったものは予想される発話環境の一つである。「ちっとも／少しも」は自分のことに使う時、自分に対する不満が感じられるが、他人のことに使う時、他人に対する不満が感じられる。そして、「ちっとも」は「少しも」より「負的」のように思われる。「全然／まったく」は自分のことに使う時、客観的な程度の強調以外に、自己の責任を避けるようなニュアンスが感じられる。また、「まったく」は「全然」より客観的に感じられる。したがって、「少量完全否定の副詞」は内的で、相対的に主観的であるのに対して、「全量完全否定の副詞」は外的で、相対

的に客観的であるのではないかと思う。

4.2 肯定述語との共起状況

少量完全否定の副詞は否定述語としか共起しない⁶が、全量完全否定の副詞は肯定述語とも共起できる⁷。完全否定を表す副詞は一種の否定対極表現とされ、極限の量・程度を意味する語がなりやすい。というのも語用的に言葉の経済性に共通する。Horn (1989) では、最も否定対極表現になりやすい語は最小極限を表す語であると述べている。これは、おそらく少量なものや無価値のものが一番よく否定的に思われるのだと思う。少量完全否定の副詞は否定としか共起しない原因もそこにあると考えられる。

次に、全量完全否定の副詞が肯定との共起について考察を進める。共起する肯定述語に「語彙的否定形式」と「その他の肯定形式」にわかれる。

4.2.1 語彙的否定形式

本稿は工藤 (2000) が語彙的否定形式に対する分類⁸の仕方を援用し

6 BCCWJで検索した結果、「少しも」が肯定文で用いられる例文は二例あった。

例1：私が決して家へ足踏みせず、少しも早く別れたいという意志を、人を介してなりとも夫に申し入れて、はっきりと決着をつけ… (『安西篤子・山本道子・岩橋邦枝・木崎さと子』)

例2：「…いづれ吉原の者どもより浅黄裏さながらに侮られる、と案じて少しも早く…」
「お教えしようと存じましてね、ふっ飛んできたんでさあ。」(『川柳侍』)

上記の二例はいずれも「少しも早く」という形式で、「わずかでも、すこしでも」の意味になる。この形式での肯定との共起は極めて少ないため、「少しも」を基本的に否定としか共起しない語とする。

7 「全然」は昭和中期から、否定と呼応する副詞として定着したが、近年肯定と共起して「全然いい」のような「程度強調」の用法が特に話し言葉に増えたようである。言葉は時代とともに変わっていく存在であって、肯定との共起は間違いとは言い難い。本来、「とても」も否定と呼応する用法のみであったが、何らかのきっかけで程度副詞のように肯定とも共起するようになって今の用法に定着した。しかし、今の使用実態から言うと、肯定と共起する「全然」の用法は文語より口語の方が圧倒的に多い。

8 工藤 (2000) は語彙的否定形式を意味の観点から六つのタイプに分けた。①〈不可能〉②〈困難〉③〈欠如・消滅〉④〈不一致〉⑤〈負の評価〉⑥〈気にしない〉

て、補充しながらも、BCCWJでの共起例を分析して、「全然、まったく」と共起する語彙的否定形式を表2のように整理した。

表2 「全然、まったく」と共起する語彙的否定形式

全量完全否定副詞		全然	まったく
語彙的否定形式のタイプ			
〈欠如・消滅〉	否定接頭辞派生語	無	無関係、無関心、無視、無償、無能、無頓着、無意味、無感覚、無反応、無防備
		不	不可能、不同意、不備、不明
		未	未熟
		非	非効率
		その他	欠けている、忘れる、失う、予想外、論外
〈不一致〉		違う、別、異なる、変わる、逆、反対、見当はずれ、でたらめ	
〈負の評価〉		駄目、つまらない、素人、離れる、めちゃくちゃ	駄目、素人、切り離す、離れる、めちゃくちゃ、苦しい、中途半端
〈気にしない〉		平気、いける、大丈夫	平気、大丈夫

次に、それぞれのタイプの例文を見ていきたいと思う。

(1) 〈欠如・消滅〉タイプ

多くの否定接頭辞⁹のついた語彙的な派生語がこのタイプに属している。「無／不～」の方が最も多い。

「無～」：無関係、無関心、無知など

39) 僕のような政治・経済にまったく無知な門外漢にもこの国がエネルギーと新しい希望に満ちていることが感じられた。(『瀬戸内を泳ぐ魚のように』)

40) あなたが、あたしたちの生活を一所懸命歪曲したのは全然無意味だったことになるんじゃない？(『いつわり』)

「不～」：不備、不自由、不可能、不明など

41) 私たちはある程度、準備をしてきたつもりでしたが、現実的には全然不備で、特に妻の物は足らず…(『淳』)

42) ぼくのいた位置からは、そのなにかを見わけることはまったく不可能でした。(『地下の怪寺院』)

そのような派生語以外に、「欠けている、忘れる、失う、予想外、論外」が挙げられる。しかし、「全然」との共起例はないようである。

43) 自民党、公明党の議員には「多様な表現、言論の必要性」という視点はまったく欠けている。(『包囲されたメディア』)

(2) 〈不一致〉タイプ

相違を表す語で、「違う」「異なる」「別」などが挙げられる。このタイプの語は「全然、まったく」との共起に差異がないように思われる。

44) 4月と今日では相手への脅威も全然違う。(例7)の再掲)

45) Bさんは生まれ育った町とはまったく異なる場所で、だれとも話

⁹ 「無」「不」「未」「非」などである。

すことができずにいた。(『女性障害者とジェンダー』)

- 46) まりあとの旅で歩くことは苦にならなくなっていたが、それとは全然別の話だった。(『天と地の娘』)

(3) 〈負の評価〉タイプ

「だめ」「めちゃくちゃ」などが挙げられる。

- 47) ザニーは勉強はまったくだめだが、あれだけの容貌をしていれば、勉強ができなくてかまわない。(『悪い種子が芽はえる時』)
- 48) 当時の社会党は全然だめだけれども、志ある人が社会党に入れば社会党の質も上がってくるはずだ。(『渡部昇一のラディカルな日本国家論』)
- 49) しかたなしに、半年もそのままほうっておいた。まったくめちゃくちゃだ。(『TN君の伝記』)

(4) 〈気にしない〉タイプ

「平気」「大丈夫」のような語は「気にしない」「大したくない」「かまわない」という意味を含意する語である。

- 50) あのとキハリーは、赤い短パンをはいて試合に出なくちゃならなかったのに、全然平気そうでした。(『青空のむこう』)
- 51) もちろん知らなくても全然大丈夫ですが。(『Yahoo!知恵袋』)
- 52) コーヒーやお茶用には水道水をそのまま沸かして使ってまったく大丈夫。(『年金・月21万円の海外暮らし』)

4.2.2 その他の肯定形式

「全然」は一般的に否定と呼応する語とされ、文法的否定形式やマイナス的意味を持つ語に係る用法のみが正しい用法だと言われていたが、20世紀後半から今になって、否定の意味を含意しない語との共起用法が特に話し言葉に溢れて、もはや「全然」を否定だけと共起する語と押し通すことができなくなったと感じさせられる。語例として、「全然」と

の共起に「いい、普通、美味しい、新しい、ok、いける、足りる、十分」などが挙げられる。下記の用例では、「非常に、とても」という単なる程度の強調(例54)のほか、よく「～より(の方が)全然」の形で予想に比べて違いが大きいことを意味し、「ずっと」と入れ替えられる用法(例53)、「まったく問題なく」「完全に」という意味で用いられる用法(例55)があると思われる。

53) 「街に出ると『ヤバニー(日本人)』と声をかけられます。思っていたより全然いいです。(『戦争を必要とする人びと』)

54) 人それぞれ事情があると思います。31歳なんてまだ結婚してなくても全然普通ですよ。(『Yahoo!知恵袋』2005)

55) 笑あああああパン食べたい!でも一枚食べちゃったからもうダメだ…あと五枚くらい全然いけるけどダメだ…がまん!これ以上食べたら出荷される!(『Yahoo!ブログ』)

一方、「まったく」は否定と呼応する用法のほか、肯定文に用いられる用法もある。BCCWJで統計した結果では、「まったく」は否定と呼応する例文は500件のうち、230件あり、46%を占めていて、残った半分くらいは肯定文である。共起する肯定形に、語彙的否定形式を除いて、常に「(規定語+)名詞」、「～(の)」の形式で、「完全に」(例56, 58)あるいは「実に、本当に」(例57)の意味で使われている。

56) 「ほらほら、退きな。退けていうんだよ。いやだね。まったく戦争だよ。」(『北帰行』)

57) アイビー・リーグの元教授にとっても、それはまったくめざましい成果だった。(『ネゴシエーター』)

58) やはり、恋人と逢えたのはまったくの偶然だ、と思ったほうがいっそう楽しくなり、わくわくしてきます。(『数学のことがわかる事典』)

4.3 否定と共起する述語のタイプ

3.2節で述べたように、少量完全否定の副詞と全量完全否定の副詞は、共起する動詞述語や名詞述語において、共通点は少なくない。ところが、共起する形容詞述語、慣用句的な述語の面においては相違点が現れる。

4.3.1 形容詞述語

少量完全否定の副詞は動詞述語や形容詞述語とともに共起できるが、全量完全否定の副詞は形容詞述語との共起割合は動詞述語ほど大きくない。BCCWJを使って抽出した500件の中で、「全然」と「まったく」が形容詞述語と共起した例はそれぞれ13件（「痛くない、甘くない、面白くない、おかしくない、怖くない、かっこよくない、楽しくない、眠くない、美味しくない、親しくない、よくない、かゆくない」）とゼロ件であった。

ただし、次のような状態性述語との共起が多い。

全然：「必要がない、見覚えがない、関係がない、興味がない、可能性がない、意味がない」などが挙げられる。

まったく：「問題がない、関係がない、記憶がない、異常がない、意味がない、異存がない」などが挙げられる。

4.3.2 慣用句的な述語

今西（2005）は否定形をとっている慣用句的な述語について、次の例を出して、「ちっとも」「全然」のそれぞれとの共起上の違いを提示した。

59) a. 歩くところは全然／*ちっとも見ず知らずの土地に限る。

b. 全然／*ちっとも根も葉もない作り話だったのだから。

このような慣用句は否定の形をとっているが、肯定形を否定形にしたものではないので、述語中の「ない」を取り出して呼応させることが難しい。前述したように、全量完全否定の「全然」はひたすら否定を強調するので、独立度の高い語であるが、少量完全否定の「ちっとも」は述

語の「ない」との結びつきが強いため、慣用句的な述語と共起できないのである。「まったく、少しも」も同じく振る舞う。

4.4 まとめ

これまで、少量完全否定の副詞と全量完全否定の副詞の相違点について、三節をかけて、意味的と構文的の二方面から考察してきた。意味上、少量完全否定の副詞は最小極限の否定による完全否定で、共起制限を受け、より内的、相対的に主観的であるのに対し、全量完全否定の副詞は最大極限の否定による完全否定で、共起自由度が高く、より外的、相対的に客観的である。構文上、少量完全否定の副詞は否定述語としか共起しないが、全量完全否定の副詞は肯定述語（語彙の否定形式とその他の肯定形式）とも共起できる。さらに、共起する否定述語のタイプに形容詞述語と慣用句的な述語における差異が特に顕著に見られる。具体的には、少量完全否定の副詞は動詞述語や形容詞述語とともに共起できるが、全量完全否定の副詞は形容詞述語との共起割合は少なく、状態性述語との共起が多い。また、全量完全否定の副詞は独立度の高い語で慣用句的な述語との共起も観察されるが、少量完全否定の副詞は述語の「ない」との結びつきが強いため、慣用句的な述語と共起できないのである。

5. 終わりに

本稿は量・程度の完全否定を表す副詞の二つのタイプについて、「少しも」「ちっとも」「まったく」「全然」を抽出して、できるだけ全面的、体系的に考察したものである。その意味・構文における共通点と相違点を以下の表3のようにまとめた。

表3 「全量完全否定の副詞」と「少量完全否定の副詞」の比較

		全量完全否定の副詞 （「全然、まったく」）	少量完全否定の副詞 （「少しも、ちっとも」）	
共通点	意味	述語の程度、数量、頻度に対する完全否定；程度の限定が典型		
	構文	①スケールのない否定文脈では生起できない		
		②動詞述語との共起が基本 a. 認識活動を表す動詞が特徴的 b. 静態動詞や可能動詞とも共起		
		③程度性のある名詞述語とは共起しうる		
相違点	意味	最大極限の否定による完全否定で、共起自由度が高い：外的、客観的（相対）である。	最小極限の否定による完全否定で、共起制限を受ける：内的、主観的（相対）である。	
	構文	肯定	共起できる ①語彙的否定形式（〈欠如・消滅〉〈不一致〉〈負の評価〉〈気にしない〉） ②その他の肯定形式	共起できない 原因：最小極限を表す語で、一番よく否定的に思われる
		否定	形容詞述語との共起が少ないが状態性述語と共起できる	動詞述語と形容詞述語とも共起する
	慣用句的な述語と共起する		慣用句的な述語と共起しない	

「全量完全否定の副詞」と「少量完全否定の副詞」はともに否定を強める時に使う副詞であって、意味や構文の面での類似性が高いが、完全否定を実現する角度の違いによって、相違点が少なくない。「少量完全否定の副詞」は最小極限の量・程度が否定されるので、否定との結びつきが一層強く、構文的に制限を受けながら、内的、相対的に主観的な心情が強い。それと対照的に、「全量完全否定の副詞」は最大極限の量・程度が否定されることで、肯定・否定文にともに使え、構文的な共起自由度が高く、より外的、相対的に客観的な意味が読み取れる。

本稿は程度性と評価性の二面性を備える完全否定を表す副詞を量・程度の観点から分類、考察し、体系的に類別間の違いについて検討したが、各類別内の相違点については少し触れることに止まり、詳しい検討は別稿に譲ることにする。そして、分類の論理性をさらに検証するため、今後の研究に他の副詞をも検討し、結論を修正していきたいと思う。また、中国語との対照研究を加え、両言語における普遍性と特殊性を明らかにすることも今後の課題にする。

参考文献

- 有光奈美（2002）「否定的文脈と否定極性項目に関する一考察—“not at all” vs. 「全然」を中心に」『言語科学論集 = Papers in linguistic science』8
- 今西真理子（2005）『「ちっとも」の使い方：「全然」と比較して』『外国語教育：理論と実践』31
- 奥田靖雄（1983）「格名詞と動詞との組み合わせ」『日本語文法・連語論』むぎ書房
- 工藤浩（1983）「程度副詞をめぐる」『副用語の研究』明治書院
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 工藤真由美（1999）「否定と呼応する副詞をめぐる：実態調査から」『大阪大学文学部紀要』39
- 工藤真由美（2000）「否定表現」『時・否定と取り立て』岩波書店
- グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版
- 田中敏生（1983）「否定述語・不確定述語の作用面と対象面—陳述副詞の呼応の内実を求めて—」『日本語学』2-10
- 仁田義雄（2002）「副詞的表現の諸相」『新日本語文法選書3』くろしお

出版

増井典夫（1996）「否定と呼応する副詞と程度副詞についての覚書」『愛

知淑徳大学現代社会部論集』創刊号

森田良行（1977）『基礎日本語1—意味と使い方』角川書店

山田小枝（1997）『否定対極表現』多賀出版

渡辺実（1983）『副用語の研究』明治書院